

小笠原諸島における方言イメージ多変量解析と メディア接触・属性差の影響

阿部 新

1. はじめに

方言イメージの観点から見て、日本各地の社会の中に「方言主流社会」と「共通語中心社会」という二つの種類の社会の存在が考えられている(言語編集部編 1995)。方言主流社会とは「方言と共通語が連続的な言語様式として共生しながらも、どちらかといえば、日常の言語生活を方言で営むことが自然な社会、そしてその方が方言話者たちにとって互いの心的距離を円滑に保つことができる社会」(佐藤 1995: 33)であり、青森県弘前市がその例である(佐藤 1995、1996)。一方、共通語主流社会とはそれとは反対に「方言の言語的価値観を日常の言語生活に見出しにくくなった地域社会」(佐藤 1995: 27、篠崎 1995: 63)であり、千葉市、岐阜県大垣市、長野県松本市、仙台市、金沢市などが例として挙げられている。

このような方言イメージによる方言区画は、先駆的には井上(1977a, b, 1980, 1983, 1988に再録)によって全国規模で行われた。方言イメージは社会心理学的成因(ステレオタイプの地域や地域住民のイメージ、すなわち地域イメージ)とともに、方言変化・改新・伝播や方言コンプレックスを引き起こすということが理論的に位置付けられている(井上 1988: 255)。

そこで今回はこれらの理論を用いて、本稿前半では筆者が小笠原諸島で行った方言イメージについてのアンケートデータを元に小笠原諸島の方言イメージを得る。後半では方言イメージとそれを左右する社会的要因としてメディア接触との関係、男女差・在学差との関係を論ずる。

2. アンケートについて

2.1 実施の背景

アンケートの目的は、テレビ放送によって言語が影響を受けるかを解明することである。テレビによる言語への影響はこれまでも注目されてきており、方言のアクセントの共通語化への影響(馬瀬 1981)が指摘されたこともある。また、多くの人がテレビによる言語への影響をどのように考えているかについては NHK 放送文化研究所が多くの調査を行っている。1996年の「現代人の言語環境調査」では、「おかしな話し方や変な流行語」について69%が気になると答え、「おかしな話し方や変な流行語」は放送の影響であると答えた人が61%いた(加治木 1996: 53-54)。しかし、テレビによる言語への決定的な影響については否定的な意見も多い。日本語の変化(多様化と統一化)を促進・加速することはあるとしても、直接には変えない(石野 1995: 26)、という意見や、コミュニケーションの二段の流れの理論からいえば、放送の共通語といくら接触しても、個人の共通語化には結びつかない(井上 1985: 45)、という考え方があ

この「テレビによる言語への影響」という疑問に対して、興味深いデータを与えてくれるのが小笠原諸島である。これまでの小笠原の放送メディアは、戦後20数年間はラジオのみ、68年に米軍の施政下から日本に返還後の76年にテレビ放送を再送するケーブルテレビの開設、84年にNHK衛星放送の開始とそれに伴うケーブルテレビの廃止、という歴史をたどっている。そして96年にはついに都心同様の地上波8局体制(NHK、民放各社)となり、情報過疎地から脱却した(情報メディア研究会編 1997)。このことから小笠原諸島は社

会や言語がテレビからどのような影響を受けるのかを見るための「実験場」と言えよう。というのは、テレビを通じて多量の情報が社会に押し寄せた場合、それがどのような影響を社会に及ぼすかというのは、これまで日本のどのような社会でも調査・観察することが難しかったからである。テレビと小笠原諸島の社会変容に関する先行研究として、大妻女子大学・前納教授らの研究（情報メディア研究会編1997）があるが、現時点ではまだデータの間接報告であり、変容の結果は示されていない。そこで10代の若者、特に中高生を対象に、テレビを通じて多量の情報が社会に押し寄せた場合、それがどのような影響を社会に及ぼすか考察するためにアンケートを行ったのである。

2.2 概要

小笠原では1999年2月に、小笠原村立小笠原中学校55名と東京都立小笠原高校45名の全生徒合計100名を対象に行った。高校3年生は受験のため不在、高校生の一部は母島の実家に帰省して不在だった。回収率83%（合計83名）。ラジオドキュメンタリー番組制作の一環としてニッポン放送㈱ディレクター・曾我部哲弥氏の企画の元に行われたものである。曾我部氏が調査票を配布、回収した。

23区内の調査は1999年7月に練馬区立八坂中学校3年生全員87名を対象に行った。回収率96.6%（合計84名）。発表者が配布、回収した。

小笠原と練馬では内容は同じであるが、小笠原での調査票はラジオ局側が希望した調査項目が多数入っていた。その為量的には多くなり生徒の心理的負担には違いがある。ただし文言は同一である。

2.3 内容

アンケート内容は「メディア接触」「表現」「方言意識」の3部分に分かれる。

「メディア接触」では、主にテレビ視聴について質問した。これは、小笠原諸島において1996年にNHKと民放各局の地上波放送が開始されたことを鑑みて、中高生がどれくらいメディアと接触しているかを見るための設問群である。

「表現」は、東京・関西で見られる新方言・若者言葉・流行語をとりあげ、中高生の理解・使用を質問した。流行語はテレビなどのメディアからの影響の可能性のある項目をとりあげた。新方言・若者言葉は必ずしもメディアから受容されるとは限らない項目について、問うている。メディア接触に関する設問群の回答とクロスして分析することによって、メディア接触が言語行動と何らかの関係があるかを見るための設問群である。若干の項目とメディアとの関係については阿部（1999）が考察した。

「方言意識」は、東京・関西・小笠原という土地や、そこでの言葉についての意識を聞いた。メディアとの接触によって、当地の言語・社会がどのように変容するかを知るには、当該地域についての考え方を知る必要がある。東京・関西・小笠原は、小笠原の中高生にはどう捉えられているのか。それを知ることによって初めて、小笠原における社会・言語の変容を捉えうると考える。

表1 性別（無回答を除く）

	小笠原		練馬	
男	29	39.1%	47	56.0%
女	45	60.8%	37	44.0%
全体	74	100.0%	84	100.0%

2.4 サンプルの構成

2.4.1 男女・在学

性別は表1の通りである。練馬では男子が多いのに対し、小笠原では女子が多い。練馬や小笠原村民の男女比（男59.4%、女40.6%）と比べ、小笠原の中高生の男女比は逆転しており、この逆転が小笠原の若年層の特徴と言える。

表2 在学（小笠原のみ、無回答を除く）

	件数	%（全体）
中学校	40	60.6%
高校	26	39.4%
全体	66	100.0%

在学は表2の通りである。2.2で述べたとおり、高校生の中には小笠原を離れていた者がいた（受験や母島の実家への帰省）。そのため、高校生は4割程度であった。

2.4.2 本人・両親の出身

表3 本人の言語形成期の居住地（無回答を除く）

	小笠原		練馬	
小笠原村または練馬区	43	86.0%	58	78.4%
小笠原村または練馬区以外	7	14.0%	16	21.6%
全体	50	100.0%	74	100.0%

表4 両親の出身地（無回答を除く）

	小笠原・母		小笠原・父		練馬・母		練馬・父	
小笠原村または練馬区	3	6.1%	6	12.2%	8	11.0%	9	12.2%
東京都	19	38.8%	12	24.5%	15	20.5%	19	25.6%
関東（東京、小笠原以外）	12	24.5%	4	8.2%	13	17.8%	13	17.6%
関西（三重県含む）	2	4.1%	3	6.1%	5	6.8%	1	1.4%
それ以外	13	26.5%	24	49.0%	32	43.8%	32	43.2%
全体	49	100.0%	49	100.0%	73	100.0%	74	100.0%

言語形成期を6才から13才までのほぼ小学校通学期（北村1952）として、回答者本人の言語形成期における居住地（表3）をしてみる。小笠原・練馬共に現地で言語形成期を過ごした者が8割前後で大半であった。今回のアンケート回答者は比較的均一な言語環境を共有しているといえる。

両親の出身地（表4）は、生徒とは逆で小笠原・練馬ともに現地出身の両親は少ない。

練馬では両親とも東京（練馬区以外）の出身が最も多い。次いで関東（東京以外）である。一方小笠原の母親の出身地は「東京都」が最も多く、父親の出身地は「関東・関西以外」という生徒が最も多い（新島民22名）。これは北海道から長崎まで（北海道・青森・秋田・山形・福島・富山・石川・福井・静岡・広島・山口・大分・長崎）にわたる。このことは小笠原では島民の分類（表5）を見れば明らかである。回答した者のうち「移民一世」としての新島民が80%を占めている。新たに島民となった人々の子供が多いということが分かる。

したがって今回の調査対象は小笠原・練馬ともに、言語に影響のある部分では背景がほぼ共通している。つまり、生徒達の言語形成地は調査地であり、親は現地への移民一世、生徒達は移民二世という性格も共通であった。

3. 小笠原諸島での方言イメージ

この節では小笠原で得られた地元の方言イメージの回答を元に、井上（1988）の手法を用いて多変量解析を行い、小笠原の中高生の地元言葉と共通語への方言イメージの傾向ををさぐる。

3.1 小笠原諸島における地元の言葉のイメージ

小笠原におけるアンケートの中から、小笠原の言葉と共通語それぞれに対してどのよう

表5 島民分類（小笠原のみ、無回答を除く）

	件数	%（全体）
欧米系	9	13.6%
旧島民	4	6.1%
新島民	53	80.3%
全体	66	100.0%

なイメージを持つか尋ねた項目を扱う。「早口」「荒っぽい」「良いことば」「聞き取りにくい」「丁寧」「きつい」「ねばっこい」「きれい」「まのびしている」「表現が豊か」「親しみやすい」「汚い」「素朴」「やぼったい」「味がある」「悪いことば」「おだやか」「感情的」「使いやすい」の19のイメージ評価語（言語編集部編1995）について「とても思う」「思う」「そうは思わない」「なんとも思わない」のうちから一つを選んでもらった。「とても思う」「思う」という回答に1点、「そうは思わない」「なんとも思わない」という回答に0点を与え、「林の数量化理論第Ⅲ類」（以下「数量化Ⅲ類」）によって処理した。処理は“Black-Box --- data analysis on the WWW ---” (<http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/BlackBox/BlackBox.html> 1999年11月現在)というインターネットのウェブページ上の処理プログラムを使用した。

無回答などでプログラムの分析対象から弾かれたサンプルを除き、サンプル数41で処理した結果、各軸の固有値と相関係数は表6のようになった。表6から両軸とも相関係数は比較的高く、各評価語が小笠原の中高生の方言に対するイメージを説明するに足ると言える（有馬・石村1987）。

表6 各軸の固有値と相関係数

	第1軸	第2軸
固有値	0.347	0.317
相関係数	0.589	0.562

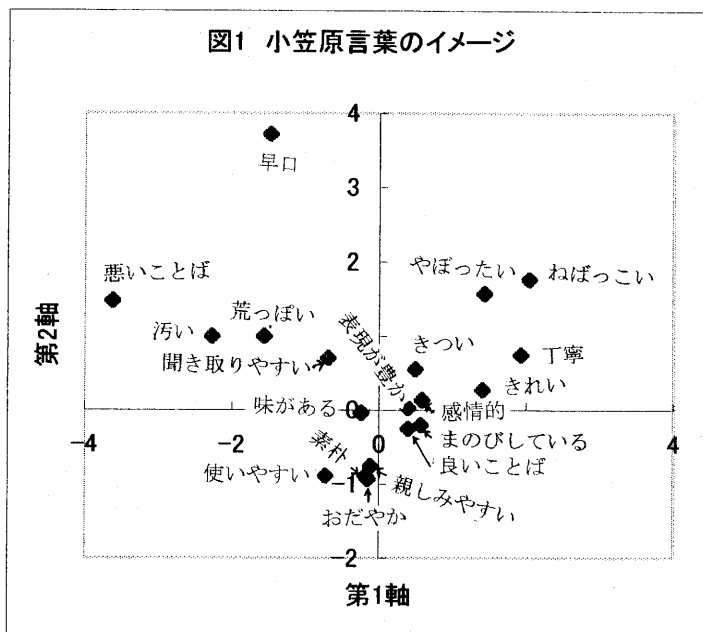
まず、もっとも相関係数が高い第1軸（横軸）を見てみると、知的マイナス評価語がプラス方向（右側）に集まり、逆にマイナス方向へは知的プラス評価語が集まっている。一方第2軸（縦軸）については、あまり決定的なことが見えないが、第2軸のマイナス方向（下方）には情的プラスの評価語が塊になって分布しており、上方には情的マイナス評価語が散在している。

ここから、小笠原のことばを評価する際には第1軸の「知的評価」が重要な基準となることが分かる。

また別の観点、多数が支持している評価語が軸の原点付近に集まるという特性から図1を見してみる。

多数が支持しているといえるのは、「味がある」「親しみやすい」「素朴」「おだやか」「良いことば」といった情的イメージがプラスの評価語や、「表現が豊か」「使いやすい」「聞き取りやすい」などの知的イメージがプラスの評価語、マイナスのイメージ評価語としては「きつい」「感情的」（情的マイナス）、「間延びしている」（知的マイナス）がある。

一方、「悪いことば」「汚い」「荒っぽい」「やぼったい」（以上、情的マイナス）、「ねばっこい」（知的マイナス）、「きれい」「丁寧」（情的プラス）、「早口」（知的プラス）は原点か



ら遠いところに位置し、小笠原の地元のことばとしての評価としては少数派であることが分かる。

3.2 小笠原諸島における共通語のイメージ

無回答などでプログラムの分析対象から弾かれたサンプルを除き、サンプル数 40 で処理した結果は各軸の固有値と相関係数は表 2 のようになった。表 7 から両軸とも相関係数は比較的高く、各評価語が小笠原の中高生の共通語に対するイメージを説明するに足ると言える。

まず、もっとも相関係数が高い第 1 軸（横軸）を見てみると、情的プラスの評価語「良いことば」「丁寧」「おだやか」「親しみやすい」などがプラス方向（右側）に集まり、逆にマイナス方向へは情的マイナス評価語（「感情的」「きつい」「やぼったい」「汚い」「荒っぽい」など）が集まっている。一方第 2 軸（縦軸）の上方には知的マイナス評価語が、下方には知的プラス評価語が集まっている。ここから、共通語を評価する際には「情的評価」が第一の基準となることが分かる。

また別の観点、多数が支持する評価語が軸の原点付近に集まるという特性から次の図 2 を見てみる。図 1 に比べて全体が原点付近に接近している。小笠原のことばに対するイメージよりも、共通語に対するイメージの方がいくらかまとまりを持っているといえるだろう。

多数が支持しているといえるのは、「味がある」「親しみやすい」「素朴」「おだやか」「きれいな」といった情的イメージがプラスの評価語や、「表現が豊か」「早口」などの知的イメージがプラスの評価語、マイナスのイメージ評価語としては「きつい」「感情的」「やぼったい」（情的マイナス）、「間延びしている」（知的マイナス）がある。

一方、「悪いことば」「汚い」「荒っぽい」（以上、情的マイナス）、「ねばっこい」（知的マイナス）、「良いことば」「丁寧」（情的プラス）、「使いやすい」「聞き取りやすい」（知的プラス）は原点から遠いところに位置し、共通語の評価としては少数派であることが分かる。

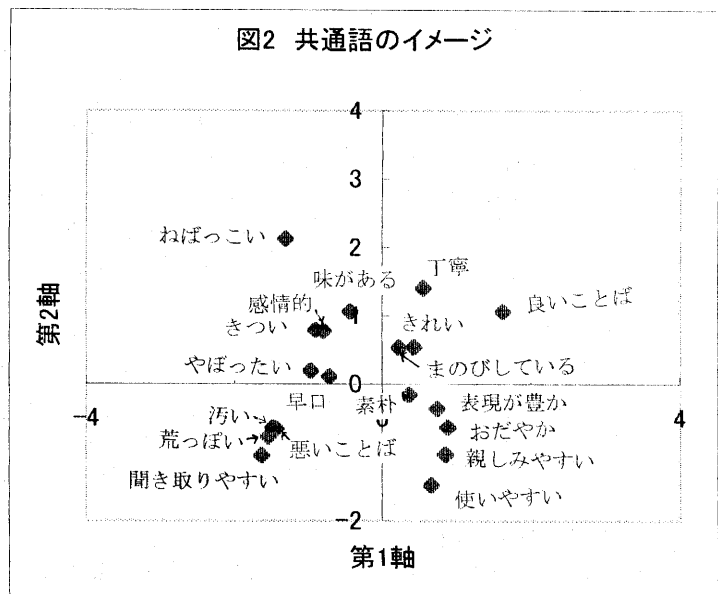
3.3 小笠原諸島における方言イメージのまとめ

本節では小笠原ことばと共通語のイメージを見た。図 1 第 1 軸が示すのは、小笠原ことばのイメージが知的評価によって判断されるということである。図 2 第 1 軸が示すのは、共通語が情的評価によって判断されるということである。

また、各評価語のうち、下線のついた評価語は小笠原ことばに対する評価と共通語に対する評価とで異なりを見せた語である。そこから分かることは、「きれいな」（情的プラス）

表 7 各軸の固有値と相関係数

	第 1 軸	第 2 軸
固有値	0.413	0.269
相関係数	0.643	0.518



「早口」(知的プラス)「やぼったい」(情的マイナス)が小笠原ことばのイメージであると捉える中高生は少数派で、「良いことば」(情的プラス)「使いやすい」「聞き取りやすい」(知的プラス)が小笠原ことばのイメージであると捉える中高生が多数派だということである。

4. 小笠原諸島での方言イメージとメディア接触

前節から、小笠原のことばと共通語に対する評価語は異なっていることが分かった。このことは生徒達が小笠原ことばと共通語の間に何らかの違いを感じていることに他ならない。つまりこの違いは方言イメージの違いである。

しかし小笠原諸島は日本への返還後まだ30年しか経っておらず、確固たる当地方言への意識はないとの考え方もあろう。長谷川(1998:170)は「生徒から島独自のことばを、固有名詞以外に殆ど耳にできない」ことが驚きとともに語られ、事実今回調査した生徒達の自由回答の一部から「小笠原には方言はない」と意識するものも少なからずいた。

方言イメージに関する差異が現に存在することを踏まえて、その差異を引き起こす社会的要因としてメディア接触を取り上げる。

4.1 小笠原諸島の中高生のメディア接触・概略

小笠原諸島で主に接触があるメディアはテレビである。新聞・雑誌などの活字メディアは船で週に一回運ばれてくる程度だからである。このことは本土とは大きな違いであり、新しいメディアであるテレビは日常頻繁に接するほぼ唯一のメディアとも言え、影響力が大きいことが考えられる(阿部1999)。

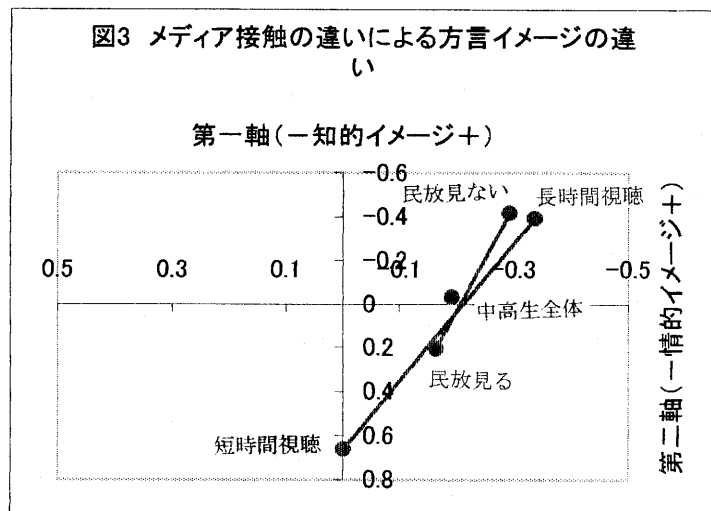
練馬での結果と比較して、その他のメディア接触の特徴を挙げる(阿部1999)。

- ① テレビ視聴時間量：練馬に比べて視聴時間が短い。
- ② 視聴局：民放が多くNHK総合は少ない。練馬に比べ、衛星第二とMXテレビの視聴は多い。
- ③ 視聴理由：娯楽志向が最多。ほかの人のおつきあいで見る者が練馬に比べて多い。
- ④ 視聴番組：歌番組・ドラマ・バラエティーの視聴が多いのは練馬と同じである。ニュース番組・スポーツ・天気予報の視聴が練馬より少ない。

これらの特徴から「テレビ視聴時間量」と「視聴局」を取り上げ、これらの視聴傾向が方言イメージに何らかの影響を及ぼしているのか、検証してみよう。

4.2 メディア接触と小笠原ことばの方言イメージ

まず、「テレビ接触時間量」を「短時間視聴者」と「長時間視聴者」に分ける。「視聴局」は「民放を見ると答えた者」と「答えなかった者」とに分ける。図1の小笠原ことばの方言イメージ数値から、各メディア接触傾向の平均値²⁾を出し、小笠原ことばへのイメージとして数量化Ⅲ類の座標



上にプロットする(図3)。図を見やすくするため、図の右上が知的・情的にプラスになるように軸の向きを変えてある。

小笠原全体の平均値は原点に近いところにあり、小笠原ことばに対して全体が持っている知的イメージ、情的イメージは希薄で無性格であることがわかる。小笠原の地元のことばに対してイメージを抱けない、もしくは「方言などない」という意識が表れていると言えよう。

視聴時間別に見ると、短時間視聴者は全体に比べて知的・情的共に低い位置に現れた。一方長時間視聴者は知的にも情的にもプラス評価を下していることが分かる。長時間テレビを見ることによって小笠原のことばに対して良いイメージを持つようになったことを示す。

民放を見るかどうかによって分けてみると、民放を見るという者は中高生全体が持つイメージに近い。一方見ると答えなかった者は小笠原のことばに対して相対的に良い評価をしている。民放を見る者の方が小笠原ことばへの評価を相対的に下げている。

以上から、視聴時間量や視聴局の異なりによって方言イメージが異なることが分かった。違いが大きいのは視聴局よりは視聴時間であった。

表8 小笠原ことばに対しての方言イメージ多変量解析でのメディア接触人数

	長時間	短時間	合計	無回答
視聴時間	11	29	40	1
	はい	いいえ	合計	無回答
民放視聴	20~33	8~21	41	0

4.3 メディア接触と共通語の方言イメージ

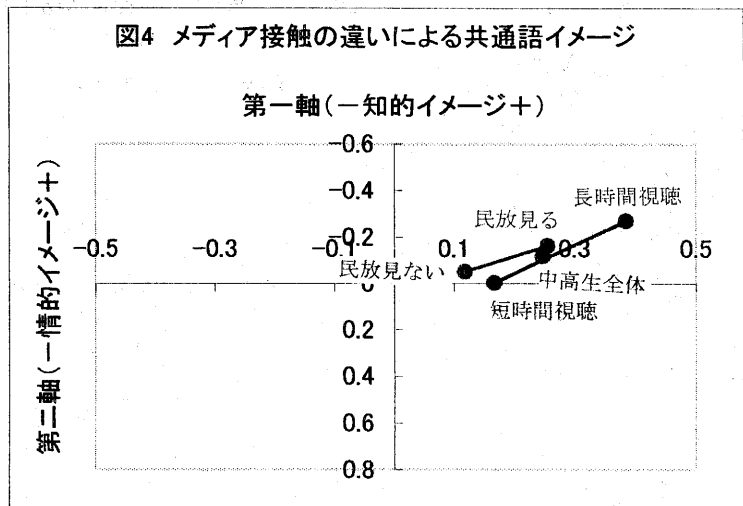
前節と同様に、図2の共通語の方言イメージ数値から、各メディア接触傾向の平均値を出し、共通語へのイメージとして数量化Ⅲ類の座標上にプロットしてある(図4)。図を見やすくするため、図の右上が知的・情的にプラスになるように軸の向きを変えてある。

小笠原全体の共通語イメージの平均値は、小笠原ことばへのイメージ(図3)よりもやや情的プラスの方向にある。しかしその位置の違いは小さい。中高生全体が持つ共通語のイメージは小笠原ことばへのそれとほぼ同一と見ることができよう。

視聴時間別に見ると、長時間視聴者の方が図の右上方に位置し、共通語に対して良いイ

表9 共通語に対しての方言イメージ多変量解析でのメディア接触人数

	長時間	短時間	合計	無回答
視聴時間	12	28	40	0
	はい	いいえ	合計	無回答
民放視聴	20~33	7~21	40	0



メージを持っていることが分かる。短時間視聴者はより原点に近く、共通語への評価に関し

て無性格である。

民放を見るかどうかによって分けてみると、民放を見ると答えなかった者の方が見る者よりも、知的イメージに関して若干悪いイメージを持っている。民放を見ると答えた者は中高生全体が持つイメージに近い。民放を見ない者の方が共通語への評価を相対的に下げている。

以上から、視聴時間量や視聴局の異なりによって共通語への方言イメージも異なることが分かった。視聴局よりは視聴時間で違いが大きいのは小笠原ことばへのイメージと同様だった。

4.4 小笠原諸島における方言イメージとメディア接触のまとめ

メディア接触の傾向の違い、特に「視聴時間量」と「民放を視聴するか否か」によって中高生全体を二分して平均を求めた。その結果二者間で方言イメージの違いを見出すことができた。小笠原ことばに対して、共通語に対しても、その違いが大きいのは視聴局よりは視聴時間であった。

また図3と図4を比べると、小笠原ことばへの方言イメージでの異なりの傾きは情的イメージに関して大きい。共通語への方言イメージの異なりの傾きは知的イメージに関して大きい。つまり小笠原ことばへの方言イメージに関しては「情的イメージ」の違いが顕著で、共通語へのイメージでは「知的イメージ」の違いが顕著であることが分かった。

5. 方言イメージと男女差・在学学校差

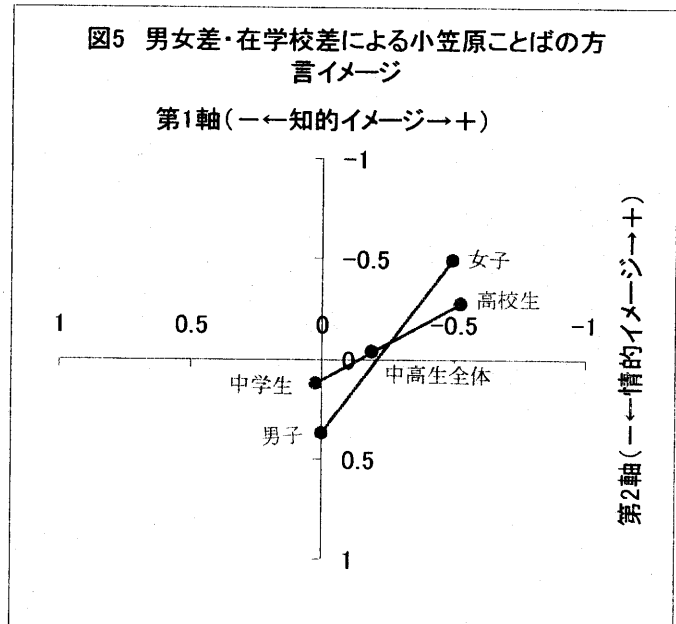
第3節において、小笠原のことばと共通語に対して中高生が持つイメージ評価語は異なっていることが分かった。しかし第4節では中高生全体の小笠原ことば・共通語双方のイメージは座標上でほぼ似た位置に現れた。したがって、中高生各人を多変量解析にて処理しても違いが見られないということだ。

そこでメディア接触の傾向が方言イメージに何らかの影響があるか検証した。視聴時間量と民放視聴の傾向と方言イメージの関係を見たところ、視聴時間の長さが民放を視聴するか否かよりも影響を及ぼしていることが分かった。

ところが、この結果とて、図1や図2の中にプロットしてみればそれほど大きな差ではなく見えてしまうことだろう。さらに大きな差をもたらす要因として男女差と在学学校差を見てみよう。

表10 小笠原ことばに対しての方言イメージ多変量解析での男女差・在学学校差

	男	女	合計	無回答
中学生	10	14	24	1
高校生	7	8	15	1
合計	17	22	41	2



5.1 小笠原ことばの方言イメージと男女差・在学差

図1の小笠原ことばの方言イメージ数値から、男女差と在学による平均値を出し、小笠原ことばへのイメージとして数量化Ⅲ類の座標上にプロットする(図5)。

小笠原全体の平均値は図3と同じで原点に近いところにあり、無性格である。

男女別に見ると、男子は女子に比べて情的にも知的にもかなりマイナスのイメージを小笠原のことばに対して持っている。逆に女子はかなりプラスのイメージの方言イメージを持つ。

在学差では、中学生は原点にかなり近く、小笠原のことばについてはあまり評価ができていない。高校生はそれに比べてかなりプラスのイメージを持っている。男女差よりも在学差の方が傾きが緩やかなので、知的イメージでの評価が行われていることが分かる。

以上から、女子または高校生の方が小笠原のことばに対して良いイメージを持っていることが分かった。中学生はイメージを評価していない。また、男子はややマイナスイメージを持っている。

5.2 共通語の方言イメージと男女差・在学差

表 11 共通語に対しての方言イメージ多変量解析での男女差・在学差

前節と同様に、図2の共通語の方言イメージ数値から、男女差と在学による平均値を出し、小笠原ことばへのイメージとして数量化Ⅲ類の座標上にプロットする(図6)。

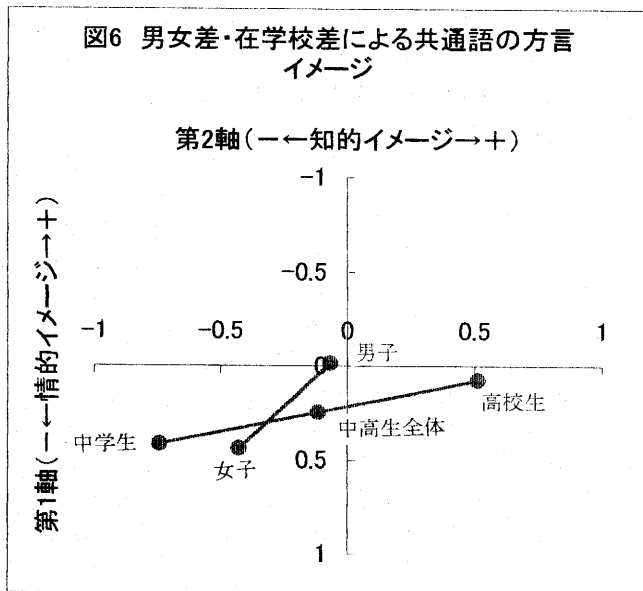
	男	女	合計	無回答
中学生	4	15	20	1
高校生	6	11	17	3
合計	10	26	40	4

小笠原全体の共通語イメージの平均値は図4と同様で、知的にも情的にもややマイナスの方向にある。しかしその位置の違いは小さい。図3と図4で見たように、中高生全体が持つ共通語のイメージは小笠原ことばへのそれとほぼ同一である。

男女別では、女子の方が男子よりも共通語をマイナス評価していることが分かる。男子はほぼ原点付近にあり、共通語に対して無性格で評価できていない。

在学差では、中学生よりも高校生の方が共通語を知的にプラス評価している。その差はかなり大きい。ただし、情的評価はそれほど変わらず、両者ともどちらかといえば情的にマイナスイメージである。

以上から、女子または中学生の方が共通語に対して悪いイメージを持っていることが分かった。男子はイメージを評価していない。また、高校生はかなりのプラス評価をしている。



5.3 方言イメージと男女差・在学差のまとめ

本節では中高生全体を男女差・在學校によって二分して平均を求めた。その結果二者間で方言イメージに違いを見出すことができた。男女差について、女子は小笠原ことばについてプラスイメージを持つが、男子は共通語にプラスイメージを持つ。中高生と高校生では小笠原ことばと共通語のどちらに対しても高校生の方がプラスのイメージを持つ。特に差が大きかったのは、共通語に対する在學校差だった。

また図5と図6を比べると、小笠原ことばへの方言イメージでの異なりの傾きは情的イメージに関して大きい。共通語への方言イメージの異なりの傾きは知的イメージに関して大きい。つまり小笠原ことばへの方言イメージに関しては「情的イメージ」の違いが顕著で、共通語へのイメージでは「知的イメージ」の違いが顕著であることが分かった。このことは第4節のメディア接触傾向による差と同じ傾向だ。

6. おわりに一方イメージに影響を与えるものとはー

以上、本稿前半では、筆者が小笠原諸島で行った方言イメージについてのアンケートデータを元に小笠原諸島の方言イメージを得た。アンケートで尋ねたイメージ評価語への回答を多変量解析したところ、「きれい」(情的プラス)「早口」(知的プラス)「やぼったい」(情的マイナス)が小笠原ことばのイメージであると捉える中高生は少数派で、「良いことば」(情的プラス)「使いやすい」「聞き取りやすい」(知的プラス)が小笠原ことばのイメージであると捉える中高生が多数派だということが分かった。

後半では小笠原諸島と練馬でのアンケートデータを元に、方言イメージを左右する社会的要因として方言イメージとメディア接触との関係、男女差・在學校差との関係を論じた。小笠原ことばに対しても、共通語に対しても、その違いが大きいのは視聴局よりは視聴時間であった。また、男女差について、女子は小笠原ことばについてプラスイメージを持つが、男子は共通語にプラスイメージを持つ。中高生と高校生では小笠原ことばと共通語のどちらに対しても高校生の方がプラスのイメージを持つ。特に差が大きかったのは、共通語に対する在學校差だった。小笠原ことばへの方言イメージに関しては「情的イメージ」の違いが顕著で、共通語へのイメージでは「知的イメージ」の違いが顕著であることが分かった。

以上から、方言イメージへの影響の与えやすさは以下のようになる。

視聴時間>視聴局
在學學校差>男女差

視聴局に関しては、見る人と見ない人の差が最も少なかったもので、本稿で検討した4種類の要因のうちもっとも影響を与えない要素と言えよう。また在學校差は図6において大きな差を生み出していたので、4つの中で恐らく最も影響を与える要素と言えよう。視聴時間と男女差との影響力の差については現時点では容易に判別できない。視聴局がもっとも影響力が小さく、在學校差がもっとも大きいので、仮に「メディア接触」に関する要素の方が属性差よりも影響力がないとすると、「男女差>視聴時間」という関係が考えられるかもしれない。この件は今後の課題となる。

謝辞

アンケートに御協力頂いた、小笠原村立小笠原中学校、東京都立小笠原高校、練馬区立八坂中学校の皆様にお礼申し上げます。また、アンケートの提案、実施に多大な御尽力をされたニッポン放送(株)曾我部哲弥氏にもお礼申し上げます。御協力ありがとうございました。

注

- 1) 「新島民」とは、小笠原諸島の返還後に島へ移住した島民のことである。
- 2) 表 8 中の無回答は平均算出に含めない。また民放視聴者とは、よく見るテレビ局をいくつでも選ばせる質問で在京民放 5 局を選んだ者である。表中で用いたイメージ評価の数値は各局に対して平均数値を求め、さらにそれを 5 局で平均した値である。以下、表 9、10、11 も同様である。

参考文献

- 阿部 新 (1999) 「メディアと若者の言語使用—小笠原諸島の中高校生—」『日本社会情報学会第 4 回大会報告論文集』,14-15.
- 有馬 哲・石村貞夫 (1987) 『多変量解析のはなし』,東京:東京図書.
- 石野博史 (1995) 「テレビは日本語を変えない」『言語』24/1,26-33.
- 井上史雄 (1977a) 「方言イメージの多変量解析 (上)」『言語生活』311,82-91.
- 井上史雄 (1977b) 「方言イメージの多変量解析 (下)」『言語生活』312,82-88.
- 井上史雄 (1980) 「方言のイメージ」『言語生活』341,48-56.
- 井上史雄 (1983) 「方言イメージの多変量解析による方言区画」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題 第一巻 社会的研究篇』,東京:明治書院.
- 井上史雄 (1985) 『新しい日本語—《新方言》の分布と変化—』,東京:明治書院.
- 井上史雄 (1988) 『言葉づかい新風景 (敬語と方言)』,東京:秋山書店.
- 加治木美奈子 (1996) 「“日本語の乱れ”意識は止まらない〜第 10 回現代人の言語環境調査から②〜」『放送研究と調査』1996 年 9 月号,52-65.
- 北村 甫 (1952) 「子どもの言葉は移住によってどう変わるか」『言語生活』8.
- 言語編集部編 (1995) 『変容する日本の方言』,東京:大修館書店
- 佐藤和之 (1995) 「方言主流社会—地域構成員の多様化とその言語意識」言語編集部編『変容する日本の方言』,20-33.
- 佐藤和之 (1996) 『方言主流社会—共生としての方言と標準語—』,東京:おうふう.
- 篠崎晃一 (1995) 「東京近隣の共通語主流社会における言語意識」言語編集部編『変容する日本の方言』,62-73.
- 情報メディア研究会編 (1997) 『メディアの多様化と小笠原社会の変容 (1)』,東京:情報メディア研究会.
- 長谷川佳男 (1998) 「父島の言語教育環境に関する試論」『日本語研究センター報告 (特集:小笠原諸島の言語文化)』6,東大阪:大阪樟蔭女子大学日本語研究センター,161-174.
- 馬瀬良雄 (1981) 「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」『国語学』125,1-19.
- Black-Box --- data analysis on the WWW --- (1999 年 11 月現在) <http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/BlackBox/BlackBox.html>

(東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程地域文化専攻在学中)